

『源氏物語』 ミヤンマー語翻訳における仏教と怨霊信仰をめぐる

K H I N W I N E Y E

キン
ワイン
シ

第一節 はじめに

『源氏物語』の外国翻訳は、一九二五年、アーサー・ウェイリー (Arthur Waley) による英語訳から始まったといえる。一八八一年の末松謙澄による部分訳はあるものの、ウェイリーの翻訳はセンセーションをまき起こしたという¹⁾。以来、多くの外国語訳が左記の表が示すように、次々となされてきた。

言語	年代	翻訳者	その他
英語	一九二五 一九七五 二〇〇〇	アーサー・ウェイリー (Arthur Waley) エドワード・G・サイデンスティック (Edward G. Seidensticker) ロイヤル・タイラー (Royall Tyler)	「鈴虫」巻を除く
オランダ語	一九三〇	エレン・フォレスト	
ドイツ語	一九三七 一九八五	ヘルベルト・ヘルリチユカ (Herbert H. Heritschka) オスカー・ベンル (Oscar Benl)	ウェイリー訳からの翻訳 和歌の訳に工夫
イタリア語	一九四四 一九五七	ピエロ・ジャイエ (Piero Jahier) アドリアーナ・モッティガ	「浮き舟の姫君―夢の浮橋―」 「源氏物語、輝く皇子」 「鈴虫」巻を除き、四一帖まで (ウェイリー訳からの翻訳)

韓国語	一九七五 一九九九	柳呈 田浴新	
フランス語	一九七七	ルネ・シフェール (Rene Steffert)	
中国語	一九八〇 一九九六 二〇〇二	豐子愷 殷志俊 梁春	
ロシア語	一九九三	チアナ・ソコロウ・デリューシナ (Tatiana Sokolova-Delusia)	原文からの直接訳

表で分かるように、ミャンマー語翻訳はいまだなく、この優れた古典の文芸作品の存在すら知られていないのが現状である。参考までにいえば、ミャンマー語翻訳のある日本文芸作品は、夏目漱石『坊っちゃん』『吾輩は猫である』『こゝろ』『夢十夜』、川端康成『千羽鶴』、吉本ばなな『キッチン』、竹山道雄『ピルマの豎琴』、橋田壽賀子『おしん』、星新一『ノックの音が』、星野富弘『限りなく優しい花々』があげられるくらいである。それに加え、この全ての翻訳は、一人の翻訳者イェー・ミヤ・ルイン (YE MYA LWIN 〈一九四九〉一九八一年に日本に留学し、現在、ミャンマー日本大使館に勤務) によって訳されたものである。

世界での『源氏物語』に対する評価は、「古典における世界文学の最高傑作」という輝かしい評価に始まり、「世界で最も古の長編写実小説」、「世界三大古典の一つ」、「最初の恋愛物語における世界的傑作」、「世界の十二大小説」、「世界文芸史の一つの大きな謎」など高い。稿者は、何とかこのような『源氏物語』を、ミャンマー語を母語とする人達に原文に忠実に伝えたいと考えている。民族にはそれぞれ固有の文化があり、翻訳は異文化を理解してもらうための行為なので困難がつきまといっている。しかし翻訳にあたっては、異文化間の言語が一对一に対応しているわけではない。『源氏物語』は、日本の王朝文化を枠組みとしているから、その王朝文化を支える政治・社会・宗教・習俗、さらに家族・氏族共同体の原則、結婚制度、当時の子女教育といった様々な問題がある。本論は、『源氏物語』ミャンマー語訳に向けての基礎作業の一環である。

また、古典文学である『源氏物語』の翻訳は、近代・現代の文学作品の外国語訳と比べ、はるかに問題点が多く困難である。言い換えると、空間的な問題、すなわち二次元性の問題点・困難性だけではなく、年代すなわち時代軸も関与した〈三次元〉的な問題点・困難性がある。これはまた、異文化性という点からいえば、『源氏物語』の翻訳には、二次元的異文化コミュニケーションの壁・異文化衝突にとどまらず、三次元的異文化コミュニケーションの壁・異文化衝突が存在しているといえる。したがって、本論では、異文化衝突・異文化の厚い壁の中でも、宗教・習俗の異文化衝突をとりあげ、『源氏物語』ミャンマー語翻訳は、どのように仏教(信仰を含む)文化を移しかえられるかという問題を、仏教化及び仏教語彙・文法などの対応する側面から考える。

宗教や信仰は、それぞれの文化・社会にとって基層的な要素であることはいうまでもない。異文化性とは、結局、この宗教と信仰の違いにあるといってもよい。『源氏物語』の翻訳にあたって、各国語の翻訳家が困難を感じたのは、この宗教・信仰が自国のそれと全く異なり、対応する語彙がない場合が多かったからである。たとえば、浄土信仰関係でも浄土(極楽)、凡夫、観想(禪定、止観)、往生、来迎、紫雲などといった語彙、また末法思想では、正法、像法、末法、法滅、大三災などの用語が翻訳困難な語彙としてある。

ミャンマーは、日本と同じく仏教国であることから、少なくとも欧米の『源氏物語』翻訳に比べて有利な立場にある。ただし日本の古代の仏教と信仰が、現在のミャンマーのそれとは異なっている点も多いことはいうまでもない。

第二節 『源氏物語』時代の仏教とミャンマーの仏教について

平安初期、仏教と政治の強い癒着への批判から、政教分離策による仏教の刷新が図られた。これにより最澄(伝教大師)の天台宗、空海(弘法大師)の真言宗が出現し根を下ろした。真言宗は、加持祈祷を通じ、現世における欲望の実現を図る現世利益的傾向の強い宗派で、密教(加持祈祷などの秘法により即身成仏を目指す)という神秘的な儀式をもつものである。最澄により顕教が導入され成立した天台宗もまた、九世紀末になると最澄の後継者円仁・円珍により密教化していく。円仁は入唐し、この時、浄土教思想を日本に伝え、これを天台宗の教理の一部としている。これが一〇世紀半ば頃より、空也・良源・源信により浄土信仰として確立することになる。この浄土信仰は、阿弥陀仏を信じ、来世における極楽

浄土への往生を願うものであった。紫式部が『源氏物語』を書くのを支え、助言を与えたという藤原道長、そして彼の父兼家もこの時代に入る。

この時代はまた、浄土信仰が起こったもとをなす「末法」の時代（釈迦入滅二〇〇〇年後、永承七年（一一〇五年）、入末法になったといわれていた）が迫り、世の中に大災害が起こると信じられていた。浄土信仰は、この末法思想とむすびついて貴族社会のみならず当時の民衆の信仰にも入り込んでいった。『源氏物語』は、このような当時の仏教文化の中で成立したために、浄土信仰及び末法思想を大きくとりこんでいた。したがって、原文に忠実な翻訳を目指すには、この仏教文化と信仰に対する十分な配慮が必要となろう。

では、『源氏物語』が成立した一〇世紀から一一世紀にかけて、古代国家が有していた仏教信仰及び仏教文化を現代のミャンマーの仏教の方からみた場合、どのような類似と差異をもつのであろうか。

ミャンマーは、今に続く敬虔な仏教国で、男女は少なくとも一度は僧院生活を送る習慣がある。まず七歳から一一・一二歳までに剃髪して僧院生活を体験することになっている。これは、本人にとつては成人になる通過儀礼を意味し、ミャンマー語で男は「コイン（小僧）」、女は「メーティーラシン（子供の尼僧）」、その儀式は「シンピュ・ミンガラプエー」と呼ばれている。このようなことは家族にとつて《仏への功德》とされ、仏教における「積善功德」の大きな一つになっている。また、仏教を基に、日常的に瞑想が盛んに行われている。人々は、職業につき家庭生活を送りながらも、時間を作り僧院で修業生活を送ったり、また週末や会社の休みを瞑想院で過ごしたりしている。なかには長期間、半ば出家したような形で瞑想院に住み込む人もいる。その他、女性達は、母・妻・主婦としての生活が一段落する老後に、僧院で瞑想に明け暮れる生活が理想と考えている人が少なくない。そういうような人達を「ヨーギー（one who practises religious meditation）パーリ語 || yogi) とう。

次に『源氏物語』において大きく扱われている出家思想について考えてみる。出家とは、剃髪し世俗生活を離れ、仏典の学習や瞑想を中心とした禁欲生活に入ることである。『源氏物語』のなか、藤壺（賢木巻）、六条御息所（滯標巻）、空蝉（閑屋巻）、朱雀院（若菜上巻）、朧月夜（若菜下巻）、女三宮（柏木巻）、浮舟（手習巻）らが出家している。しかし『源氏物語』の女性出家者は、髪を完全に剃髪するのではなく、肩のところで切っていたようである。ミャンマーでは、男女問わず多くの人々に出家願望があり、現在、女性出家者「ヤテッパン・ティーラシン」は約三万人いるといわれてい

る。これに対して、一時的な出家者もあり、これを「ドンラバ (attainment of hard-to-achieve monk (nun) hood even if only for a short period of time)」という。ミャンマーは、現在でも、仏教教育には非常に熱心で、毎年仏教の国家試験が行われている。したがって、バガン王朝時代から行われるようになったこのような仏教的な社会環境は、まだまだこのまま続いていくことになると思える。

また、各家族・住居には仏壇があり、毎日祈りまた時間を作りお経をあげるなどしている。夜眠る前、朝起きた時、仏壇の前で三回跪拝(五体投地)両膝・両肘・額を地につけて、仏像・尊者などを拝すること)する。この時、「仏陀の九徳」や「八正道」などの経を唱えたり、瞑想したりする。また、ミャンマーの人々のなかには、護呪経「パイエイ (Sutta to ward off evil or harm)」に対する信仰心が非常に強い。人々は、日頃、時間を作り誦経している。これは法会「パイエイボエ」にて、僧により加持祈祷として誦経される。この「パイエイ」という経は、呪術的な力を持っているとされて、「源氏物語」時代の法華経の役割と似ているといえる。このようなことから、古来、多くの行事、法会において、僧侶によるこの誦経が行われている。これにより「不幸や災いから護られる」と信じられている。また日常的に身内に大病が出たりすると、信頼する僧侶を呼んで、この「パイエイ」をあげてもらい病氣治癒を願う。『源氏物語』において、桐壺の更衣が病重く衰弱し、宮中を退出する時の更衣の母君の言葉、また年老いた病の乳母を見舞った時の光源氏の言葉のなかなどに、数多く加持祈祷が登場する。この他にも呪文を唱えたり、滅罪経典を誦経したりする場面もしばしば見られる。このように千年の時代を隔てた現在、ミャンマーの地には、『源氏物語』時代の雰囲気を感じた宗教的風俗習慣がまだ残っているのである。

ここで『源氏物語』に関連し、ミャンマーの歴史を振り返ってみる。

ビルマ＝ミャンマー、その起源は「バガン」から」と言われている。というのは建国の父祖であるアノウラータ王が、一〇四四年全国を統一し、この地に「バガン王朝」を築いたからである。この時期は、『源氏物語』が書き始められたのは西暦一〇〇〇年に入ってもなくであるから、その約四〇年後、そして作者紫式部没後約三〇年、また『源氏物語』が世に出るに重要な役割を果たした、藤原道長没後約一七年ということになる。

さて仏教に帰依したアノウラータ王は、モン族の高僧シン・アラハンと出会い、仏教に帰依し、バガンに仏教を根付かせたのである。仏教はよく知られているように、ゴータマ・ブッダによって説かれた教えであり、ブッダはその出発点と

して「人生、現世は苦なり」という。仏教ではこれが大前提となっている。そして、その《苦の原因》は、人が、世の存在が《無常》であることに對する認識を欠いているからだと説く。この世の中、何一つじつと留まるものはない、全てのもは移ろい行く、生じたものは必ず滅する。《諸行無常》なのである。ブッダはこのような苦に對し、自分自身を鍛えることを説いているのである。この諸行無常という思想が、ミャンマーにおいてどのように受け入れられているのかをバガン王朝の詩から考えてみる。

一一七〇年代の始め頃、ナラパティシトゥウという機知と洞察力に優れた王がいた。彼は兄の部下であったアナンダトゥリヤを斬首の刑に処した。彼、アナンダトゥリヤは節操堅く、知的な勇者であったが不運なことに、前王の陰謀に巻き込まれてしまったのである。

アナンダトゥリヤは死に臨み、詩を唱し、ナラパティシトゥウ王に残した。

「世のなほごとく」

わが君、君もまた

時めきてのちは

うつろひ消えゆくもの一人に存し給ふ

そは自然理法のさだめなり

威かめしき卿達にかしづかれ

黄金色あやなす王宮の中に

わが君は、おごそかに座し給ふ

さまれ君が歡樂も、わだつ海の上、

かつ浮かび、かつ消ゆる水泡のごとし、

須叟の生とともに失すなり

よし君あはれみもてわが玉の緒をつなぎ

われに青天白日の日を与へたまふとち

သုတေသနိတေယောဂံ၊

ဘဝတံသိသိစေရာဂံ၊

သုတေသနိတေယောဂံ၊

ဘဝတံသိတော။

စေတောတေသနိ။

ရွှေအိမ်နန်းနန်း၊ နန်းကြီးကြီး၊ နန်းနန်းညိုနန်း၊

မင်းဂါးခင်းခင်း၊ လှေပျော်စီးစီး၊ ရွှေပြင်ပြင်၊

စည်းစိမ်စုံစုံ၊ ရှေးရိုးရှေး၊ သဘာဝဘေး

လှေထုထု၊ ရွှေပြင်ပြင်၊

စေတောတေသနိ၊ ဘဝတံသိတော။

စေတောတေသနိ။

そは羯魔の業、佛陀の現はれ、

此の世に命あるものにして

常に極まらず朽ち行き

うつろひ行く、これぞさだめなれ。

あはれなる願ひまた祈りより

必ず來るべき應報のものが來世までになひ行くをわれは欲せず

宿世の罪の果てなるこの運命

掴まんごとこそわが願ひ

從容と時を待たむ

わが胸は静かなり

やさしき君、君に遺恨のあるなく

君が御とが、わが心より許しまつらむ

そは君の行為にてはあらざればなり、

危難、死滅、そはこの人の世に

常住するなる敵にてこそあれ

自然のさだめにてこそあれ。

これを詠んだ時の王の様子が今に伝わっている。

「王、この書を読み、いたく悔恨の念を禁じ得ず、屢々喘ぎ氣絶せり」と。

この詩には、強く「來世」が意識されていることが分かる。この世、現世は、仮の宿なのである。これに対し、現世に關しては「無常」、何一つじっと留まるものはない。全てのものは移ろい行く、朽ち果てる。立派な御殿も黄金色あやなす宮殿も全て必ず消滅する、わだつ海の上に、かつ、浮かび、かつ、消ゆる水泡のごとしと訴えている。この傍点の部はミヤンマー語で「タモツダヤー・イエミエナーデツ、カナテッティ・イエブエツパマー」(သမုဒ္ဒယာ၊ ဧမိယေဏာဒေဏာ၊ ကာနာတေတ္တိ၊ ဧယျေပုဗ္ဗေပာမာ)

ကြင်နာသနား၍အားမထက်
ယခုလွတ်လည်း။
လွတ်ကြွေးလွတ်တစ်ထက်တစ်ထက်၊
ခွေခိုင်ကျဉ်း။

အတည်မြဲစေတတ်လွတ်တတ်သည်။
ရွတ်တံသဘာဝတ္ထဝါတည်း။
ရှိုင်းတော်လျော်၊
ပူဇော်အညွှန်ဝန်နိတော်။
စိုက်ကြွေဝါတံသဘာဝတ္ထဝါပွင့်၊
ကြွတ်လတ်တုံမှ။
တံ၊ ဓယုလုံကြည်ညိုစိတ်သန်၊
သင်္ခန်ဂိုချန်တစ်စစ်၊
အပြစ်မရွေးခွင့်လျင်ပေး၏။
သွေးသည်အနိစ္စ၍ခန္ဓာတည်း။။

「egg-box」となる。この部に関連して仏教の根底にある「無常・無常観」について述べた鴨長明の『方丈記』の中にも「淀みに浮かぶうたかた（水の泡）は、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまりたる例なし」の一文があり、共に「無常」の表現・喩えに對し、「水泡」に目をつけていることが非常に興味深い。

これに對して、『源氏物語』の時代はどうだったのだろうか。『源氏物語』が世に出た藤原国風文化時代、特に藤原道長、紫式部の時代は、摂関政治の全盛期であった。しかし当時の人々の心の中には、前述の仏教の根幹ともいえる「無常思想」、さらに「末法思想」が宿っていた。

仏教には正法、像法、末法という三区分別があり、『源氏物語』の頃は、仏法が衰え天災地変が起こるという「末法」が近づいてきた時期で、人々の心の中に不安が広がっていた。このようなことから貴族や庶民も含め、人々は現実に対する期待を捨て、来世における安樂、幸せを願う浄土思想が広がり、これは浄土信仰として勢力を広げていった。これにより多くの阿彌陀堂・阿彌陀仏が作られ、これらは建築、彫刻にとどまらず絵画（極樂往生を願う人々を迎えるため、西方浄土から阿彌陀仏と觀世音菩薩、普賢菩薩の三尊が雲に乗ってやって来る來迎図など）などにも及び、歴史的には浄土芸術と称されるまでになっている。

『源氏物語』の「諸行無常」の思想がみえるところは、たとえば「夕顔」の次の一節をあげることができる。

門かどは部しよぶのやうなる押し上げたる、見入れのほどなくものはかなき住まひを、あはれに、いづこかさしてと思ほしなせば、玉たまの台たいも同じことなり。(①夕顔 一三六頁)

この文では、傍点部「いづこかさして」は「世の中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞ宿とさだむる（古今・雑下 読人しらず）、何せむに玉の台も八重葎やへむらはへらむ宿に一人こそ寝め（古今六帖・六）」の引歌の技巧が使われている。これを訳すと「門は、吊り下げた部のようなものを押し上げてあって、外から見ると奥行きもなく、貧しい感じのする住居で、しみじみ気の毒な思いがするが、この世、現世はど、こでも仮の宿だ、とお考えになると、こども立派な御殿でも何ら変わりが無い、同じであろう…」となる。

ミャンマーのバガンの地で栄えた仏教は功德をつむことにより、親などの身内や自らの來世の安樂、幸せを願うもので

あつた。そしてこれがあの夥しい数のバゴダや僧院の建立・仏像・壁画などの制作につながり、ここに絢爛たる仏教化が花開いたのである。このように『源氏物語』時代の藤原国風文化とミャンマーのバガン仏教文化とは、バックグラウンドに共通の原点ともいえる仏教の教義が存在し、また来世での幸せを願うなど、当時の社会環境において多くの類似点があつたのである。

以上述べてきたことから、ミャンマーでは『源氏物語』時代に対応するバガン王朝の仏教文化・仏教思想が、延々と現存に至るまでしっかりと伝わっていることがわかる。

第三節 ミャンマーにおける死霊・精霊信仰に関して

ミャンマーの各家庭には、家庭の要である仏壇があつて、仏壇の中心は仏像である。そしてその少し下には信仰する高僧や神格の像が配置されている。この人達は神通力、超自然力を持ち、人々を守り、祈願の成就に力を貸してくれるとされている。これに加えてこの仏教の世界観の中に「ナツ」(နတ်)と呼ばれる精霊がいろいろな形で組み込まれている。そうして現在でもこの精霊に何かを願う場合、その間を取り持つ霊媒(ナツガードー(နတ်守り) *nat god*)という存在が利用されることもある。霊に関しては、『源氏物語』においても後述するように「夕顔」「葵」巻などで大きく取り扱われ、重要な役割を担っている。そこで、『源氏物語』ミャンマー語翻訳に向けて、ミャンマーにおける怨霊信仰、さらに死霊・精霊として霊媒について考察を加える。

ミャンマーには、宗教の原初的な超自然観であるアニミズムのような觀念も生き続けている。すなわち自然界のあらゆる事物は、固有の靈魂や精霊などの靈的存在を有し、地上に起こる諸現象は、全てその意思や働きに起因するものと信ずるようになっていった。これが自然・精霊崇拜に、そうしてさらに精霊信仰という形を作り上げていったのである。ミャンマーの人々は、人・動物そして無生物にまでも超自然的存在、氣、精霊などが宿り、そしてこれらは諸状況により、その肉體、物體から遊離、解放されると考え、これらを心底から恐れ、畏敬し、信じるようになっていったのである。これらのうち最も普通に言われる肉體からの遊離、解放が死であることは言うまでもない。そうしてこの中で最も恐ろしいのが怨霊である。

ここでミャンマーにおける怨霊についての伝説を紹介する。

この伝説は、現在のミャンマー国起源の地であると同時に、またミャンマー仏教文化発祥の地であるバガンに關係したものである。

現在のマンダレーの近く、昔、ダガウン王国という国があった。そこに非常に力の強い鍛冶屋が住んでいた。その彼にはさらに力の強い息子がいた。この息子のふるうハンマーは大地を揺るがしたという。王はその力の強い息子に異常な恐怖を抱き、彼を捕らえて殺してしまおうとしたのである。これを察知した彼は、いち早く山奥深くへ逃げ込んでしまった。しかし王は何としても彼を捕らえようとした。鍛冶屋にはこの息子の下に非常に美しい娘がいた。これを知った悪賢い王はその美しい娘を王妃に取り立て、卑怯にも兄を騙して呼び出し、捕らえてしまった。王は、捕らえたその息子をザガー樹（モクレン科の木）に縛りつけ、焼き殺そうとした。その光景を見た妹の王妃、身を翻し、燃えさかるその火の中に飛び込む。驚き慌てた王は、彼女の髪の毛を引っ張り、必死に助けようとするも、体はすっかり焼きつくされ、その美しい顔だけが残ったという。その状況は、王にとつてはさぞかし無気味なことであつたらう。こうして残虐な王により若い命を奪われた兄妹二人の霊は怨霊となり、そのザガー樹に住みついたのである。そうして彼らの怨霊はザガー樹の影を冒す、あらゆる動物、人間の命を容赦なく奪つたという。

恐れおののいた王は、このザガー樹を切り倒し、イラワジ (Irrawaddy) 川に流してしまった。このザガー樹を川から拾い上げたのが、後に周辺を統一し、ミャンマー建国の父祖と言われたバガン王朝二代アノーヤター王の祖先であるバガンの王とその住民であつた。こうして兄妹の怨霊の宿つたザガー樹は、王により二体のナツ神像として彫り出され、バガンの近くにある美しく神秘的なポウッパバー山の頂上に祀られたのである。以来この兄妹の霊は「マハーギーリ・ナツ」(大きな山の精霊) と呼ばれ、九世紀頃にはバガンの地とバガン王朝の守護霊として崇められ、その繁栄をもたらしたのである。

世界の神話伝説の中には鍛冶屋と火のエピソードがしばしば見受けられる。この「ミン・マハーギーリ・ナツ」伝説の鍛冶屋も、同じ機能を担っていると考えられる。鍛冶屋は、古来から火の力を用い、新しいものを作り出すということからまさに超能力者として畏怖され、かつ世界、ある国の王朝の思想・文化・創造者として崇敬・尊敬されたのである。この伝説の中、王が鍛冶屋をこれほどまで脅威に感じていたのは、このような背景があつたのであろう。

以上の伝説からすると、精霊あるいは怨霊信仰に支えられたこの伝説は、仏教と結びついているとはいえないが、現在のミャンマーでは、仏教の世界観の中にこの精霊信仰がしっかりと組み込まれている。

現在、美しく神秘的なポウッパー山には、マハーギーリ・ナツ（大きな山の精霊）となった兄妹の像が祀られ、多くの信心深いミャンマー人が参詣している。その神像の前には「ココ椰子の実」が供えられている。この信仰は今、仏教徒の家庭にまで広く根づいている。仏教徒は仏壇の他に、部屋の入口の対面の隅の柱に「ココ椰子の実」を祀っている。通常、仏壇の左横の柱、仏壇より下位に位置している。このことは精霊が仏陀を頂点とする仏教の世界観の中にしっかりと組み込まれていることを示している。このココ椰子の実は「ミン・マハーギーリ・ナツ」といわれ、家の守護霊であり、（ポウッパー山に祀られている兄妹の霊が宿っているということなのであろう）、家の中に他の霊（悪霊、怨霊など）が入らないように、また家に悪いことが起こらないように守ってくれるのである。人々は、毎日朝に夕に仏陀と共にこの精霊にも祈りを捧げているのである。

ミン・マハーギーリ・ナツの宿ったココ椰子の実の前には、カーテンのように布切れが下げられ、夜に閉められ、朝に開けられる。これは火に焼き殺された兄妹の精霊が、火や灯火を嫌うことに由来している。ミャンマーでは、人が亡くなると、一週間、その人の霊が自由にその家に入入りできるようにする習慣がある。この期間は、死者の霊が入りやすくなるため、家の窓を開け、守護霊であるミン・マハーギーリ・ナツ（ココ椰子の実）をも家の外に出すのである。

第四節 ミャンマーにおける仏教のヒエラルキーについて

ミャンマーにおける仏教のヒエラルキー^⑩を分かり易く簡略化すると次のようになる。

		ヒエラルキー	ミャンマー語	よみがな	その他
1	三宝 仏陀・仏法・僧侶	ဝေဒနာတရားစရိတ်	ယာတာ・トーンパー ボッタ・ダーマ・サンガ		
2	ウエイザー	ဝေဇာ	ウエツザー	person with supernatural power	

3	梵天	Ṛgvaśi	ビアマーミン	
4	帝釈天	Śakraśi	タヂヤーミン	
5	四天王	Ṛgśakraśi, Vajraśi, Brahmaśi, Indraśi	アヤツレーミエナーコ・サウシャ ウトーミン	
6	龍王	Ṛgivaśi	ナーガーミン	mythical serpent or dragon
7	ガルダ王	Ṛgivaśi	ガルンミン	mythical king of birds
8	上位ナツ	naon'Ṛgōs	アテエツナツ	神
9	下位ナツ	seon'Ṛgōs	アウナツ	祖先の精霊・三七神など

このミャンマーの仏教に関するヒエラルキーは、日本のそれに多くの点で対応していると思えるが、その中に祖先信仰から生まれているナツという精霊がいることが異なる点であろう。日本の仏教の中には、精霊は組み込まれてはいないものである。

この他、『源氏物語』翻訳に必要とされる超自然的存在としては、神聖な寺院、山、川、海など重要な場所に宿っている霊、精霊にもナツ〈Ṛgōs〉が使われ、殺害、事故など非業の死、不慮の死をとげた人達の霊に対してはアセイン・ナツ〈se:Ṛgōs〉があてはまるのであろう。また、よくいわれる幽霊や悪霊に対しては、チャツ〈Ṛgōs〉、ポウ〈Ṛgōs〉(evil spirit animating the body of a dying or dead person) / ハイター〈Ṛgōs〉、ソウンー〈Ṛgōs〉、マカウンノワー〈seon'Ṛgōs:Ṛgōs〉などを状況、場面により使い分ける。さらに生存時に悪業を犯した人の霊、精霊に対してはタイエイ〈Ṛgōs〉(ghost) / タセイ〈Ṛgōs〉という言葉などがミャンマーにはある。

第五節 「桐壺」巻・帝木三帖及び「葵」巻における仏教と怨霊信仰の翻訳をめぐる

次に仏教と信仰の扱いについて考えてみる。これは二つに分けられると思う。一つは仏教の教義・思想、これにより作

り上げられたその世界観、もう一つは数多くの仏教用語である。これらの中に翻訳困難、翻訳不可能的部分が出てくるのである。このようなことから翻訳に関連した仏教と信仰の扱いについて考えるにあたり、著名な先行者であるアーサー・ウェイリー、エドワード・サイデンステッカーの翻訳について事例をあげ、検討を加える。ここでまずあげておきたいことは、ウェイリーは来日してないのに対し、サイデンステッカーは来日していること、東京大学において池田亀鑑教授から指導を受けていることである。

① まず『源氏物語』の中、最初の歌として広く知られ、また仏の世界をそこはかとなく醸しだしている桐壺更衣臨終場面
の歌について検討してみる。

かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり (①桐壺二三頁)

□語訳 「もうこれまでです。これが私の運命なのです。一人お別れして行くのが辛いのでございます。なぜなら私
が行きたいのは生きる道、あなた様との生きる道なのですから」

すでに述べたごとく、仏教は仏陀の説いた教えである。仏陀の教えの原点、あるいは出発点は「現世は苦なり」という悟りである。さらに仏陀は「世の存在全て無常である、人はこれをしっかり認識しなければならぬのだ」という。

この歌の中、「かぎりとして別るる道」の句からは、生じたものは必ず滅する、全てのものは移ろい行くという無常観、また今生のことは前世の因縁により定まるといふ仏教の「三世因果」の思想による運命観がこもっているのが伝わってくる。しかし更衣は「今は生きたい、どうしても生きたい」と強く訴えているのである。さらに、この歌を前の、帝の言葉を受けた歌であることを考えると、「今はどうしても生きたい、そして限りあらむ道、すなわち来世への道を帝と一緒に」という気持までこの歌の中に込められている。

ウェイリーは、この歌を歌として翻訳せず、文中にて「At last! she said: "Though that desired at last be come, because I go alone how gladly would I live!" (p. 4)」と表現している。この中からは、仏教の無常観、運命観は伝わっていない。

これに対しサイデンステッカーは歌として「I leave you, to go the road we all must go. (p. 9)」と翻訳し、仏陀のいう「全

てのものは移ろい行く、必ず滅するという無常観」を出している。しかし「かぎり」の中にこもっている仏教における運命的な感じが醸しだされていないのが、難をいうなら物足りない。

また光源氏の誕生の時の、前の世にも御契りや深かりけん、(①桐壺一八頁)の翻訳においてもサイデンステッカーは [It may have been because of a bond in a former life... (p. 7)] 「...前世における二人の絆の所以であったのであろう」と仏教的に表現している。これは、来日して東京大学で学んだサイデンステッカーの仏教知識の反映であらう。

② 桐壺更衣が亡くなり、時がたつが、帝はまだ涙に明け暮れている頃のことである。

はかなく日ごろ過ぎて、後のわざなどにもこまかにどぢらはせたまふ (①桐壺二六頁)

口語訳 「いつの間にか月日がたつて行く。帝は四十九日までの七日毎の法事にも使者を立てて懇ろに(こ)申問なされる」
 ウィエリーはこの部分を、[The seven weeks of mourning were, by the Emperor's order, minutely observed. (p. 5)]と翻訳している。これを口語訳してみる。 「その七週間の服喪の法事は、帝の命によりこまかく(こ)どり行われた」になる。「後のわざなど」を七週、四十九日の法事としているが、これは四十九日まで七日毎に行われるものである。したがって、ウィエリーは、このように仏事に関してあまり深く踏み込もうとしていないことがわかる。

これに対しサイデンステッカーは、[The days went dully by. The emperor was careful to send offerings for the weekly memorial services. (p. 11)]と訳して、これを口語訳してみる。 「日々はむなしく過ぎて行った。帝は配慮して、一週間毎の法事に数々の供物を贈った」になる。この翻訳からは、仏教の無常観も感じられ、また仏教における人の死後の法事に関しても正確に表現されており、原文に近い翻訳といえよう。

③ 光源氏が重い病にあつた年老いた乳母を見舞った時の会話の中の一節である。

命長くて、なほ位高くくなども見なしたまへ。さてこそ九品のの上にも障りなく生まれたまはめ。この世にすこし恨み残

るはわるきわざとなむ聞く(①夕顔一三八頁)

口語訳 「どうぞ長生きなされ、私の位が高くなっていくことなど…見届けて下さい。そうすればそうしてこそ、浄土において九つある浄土の位の中、最高の位である九品の上として、何ら差し障りもなく生まれ変われますよ。現世に少しでも恨みが、気になることが残るのは、これは良くないことと聞いています」

この文の中の「九品の上」は仏教用語で、品は階層を意味している。浄土の階層はまず上品、中品、下品の三つに分けられ、その各品はさらに上生、中生、下生の三つに分けられ、合計九つの階層に分けられている。九品の上は、浄土の高位に当たる。この文章の中には、また当時の人々の平安朝時代に盛んになった浄土思想・教義がよく表出されている。ウエイリーはこの部を次のような翻訳している。

You must live longer yet, and see me rise in the world, that you may be born again high in the ninth sphere of Amida's Paradise. (p. 53)

「あなたはまたもつと長生きをなさり、私が昇進するのを見なければなりませんよ。そうすれば、また阿弥陀の樂園の九番目の領域の上位に、再び生まれ変わることができるでしょう」

この翻訳では、仏教用語「九品の上」の誤訳といえる。仏教用語の解釈、翻訳はしばしばこのように困難をきたす。「九番目の領域」ではないのである。

次にサイデンステッカーの翻訳をあげてみる。

You must live a long life and see the career I make for myself. I am sure that if you do you will be reborn upon the highest summits of the Pure Land. (p. 62)

「あなたは長生きをなさって、私がこれから昇進していくのを見てくれなければなりませんよ。あなたがそうなされば、あなたは浄土にて、必ずや浄土の最高の地位に生まれ変われるでしょう」

原文の内容をよく掴んだ翻訳と言える。「九品の^{このしな}上」に關しても詳しく調べたと考えられる。また当時の人々の仏教的感覚も理解していることが伝わってくる。なおミヤンマーは上座部仏教の流れを受け、パーリ語の三蔵を聖典とする南伝仏教であり、日本の大乘仏教を中心とする北伝仏教と違うことに留意しなくてはならない。

④ 次の歌は夕顔の住居、夜明け前に源氏は彼女に来世までの契りを約束する時、近くから仏前に額ずく老人のような声が聞こえてくる場面である。

優婆塞が行ふ道をしるべにて来む世も深き契りたがふな (①夕顔一五八頁)

口語訳 「在俗の仏弟子 (優婆塞) が学び、修業している仏の道に従って、私と交わした来世までも一緒という深い約束をぜひ守ってほしい」

ウェイリーはこの部分を、「...he recited the poem...」として次のように翻訳している。

[“Do not prove false this omen of the pilgrim’s chant: that even in lives to come our love shall last unchanged.”] (p. 63)
「巡礼者 (優婆塞) が詠唱していたことをたがえたりしてはいけません。来世の生ですら、私達の愛は決して変わることもなくつづく」

この訳は原文の内容とは全く異なっている。これはウェイリーがこの歌を歌として翻訳してないからである。とにかくこのあたりはこの歌のみならず、歌の前の文も含め、翻訳するのはなかなか困難な部分である。恐らくウェイリーにとって、この歌を直接翻訳するには、あまりにも厚い異文化の壁が立ちはだかつていたと考える。彼のこの部分の翻訳は全体から意味を掴み取るうとした。

これに対し、サイデンステッカーは、この部分を次のように翻訳している。

This pious one shall lead us on our way

As we plight our troth for all the lives to come. (p. 72)

「この信念深い行者（優婆塞）が私達を間違いないように導いてくれるだろう。私達が来世に対して固く誓い合っているのだから」

この翻訳もウェイリーと同様、原文の内容とはかけはなれた翻訳になっている。仏教の知識をかなり身につけているサイデンステッカーではあるが、「優婆塞が行ふ道」・「しるべにて」・「来む世」という仏教用語の意味が欧米の読者には理解不可能だと思つて、あえて仏教的教養を含まない翻訳をせざる終えなかつたではなからうか。この仏教用語をミャンマー語で訳してみると「優婆塞が行ふ道（仏の道）」が *ḥe ḥe ḥe ḥe ḥe ḥe*、「しるべにて（道しるべ）」が *ḥe ḥe ḥe ḥe ḥe ḥe*、および「来む世（来世）」が *ḥe ḥe ḥe ḥe ḥe ḥe* となり、日本とミャンマーの仏教背景がだいたい重なることが分かる。

⑤ 次に怨霊信仰に関連し、サイデンステッカーの翻訳について検討を加える。

左大臣家では、葵の上に物の怪がついたようで非常にお苦しみなさっており、またそれに加え御懐妊をも重なり、そのお苦しみも一層で、ここは源氏の君が、とりついている物の怪を験者に頼み何とか調伏してもらおうとしている時の場面である。

大殿には、御物の怪めきていたうわづらひたまへば（中略）。さはいへど、やむごとなき方はことに思ひきこえたまへる人の、めづらしきことさへ添ひたまへる御悩みなれば、心苦しう思し嘆きて、御修法や何やなど、わが御方にて多く行はせたまふ。物の怪、生霊などいふもの多く出で来てさまさまの名のりする中に、人にさらに移らず、ただみづからの御身につと添ひたるさまにて、ことにおどろおどろしうわづらはしきこゆることもなけれど、また片時離るるをりもなきもの一つあり。いみじき験者どもにも従はず、執念きけしきおぼろけのものにあらずと見えたり。(2)

葵三二頁)

口語訳 「左大臣家では葵の上に物の怪がとりついているようで、非常にお苦しみになられておられるので（中略）。源氏の君は日ごろ葵の上に情が薄かったが、何といつても歴とした北の方であり、非常に大切にしておられた。そしてこのたびは御懐妊までも重なったお苦しみのので、源氏の君は非常にご心配にお思いになり、また悲しまれ、ご自分のお部屋で悪霊などを抑え退治するため、また安産祈願のためご祈禱や何やらをいろいろ行わせなされる。これにより死霊・生霊などが数多く現れてきて、自分の素性を名乗った。しかしただ一つ憑座には全く乗り移らず、葵の上の身体にまぎにしっかりととりついているものがあつた。この霊は特に葵の君をひどくお苦しませるようなことはないが、片時も離れようとしなかつた。その霊は、並々ならぬ力を持った験者たちにも調伏されず、その執念深い様子はなみたいていなものではないようにみえた。」

サイデンステッカー訳

At Sanjo, Genji's wife seemed to be in the grip of a malign spirit... His marriage had not been happy, but his wife was important to him and now she was carrying his child. He had prayers read in his Sanjo rooms. Several malign spirits were transferred to the medium and identified themselves, but there was one which quite refused to move. Though it did not cause great pain, it refused to leave her for so much as an instant. There was something very sinister about a spirit that eluded the powers of the most skilled exorcists. (p. 174)

「三条 (At Sanjo) では源氏の妻は悪霊 (a malign spirit) にとりつかれているようであつた。(中略) 彼の結婚は幸せではなかつた。しかし彼の妻は源氏にとって大切な存在であつた。その上今はそのお腹の中には彼の子がいるのであつた。そこで彼は三条の自分の部屋で随つて何度も祈禱をさせたのであつた。これによつていくつもの悪霊が霊媒 (the medium) に移され、自分の素性を名のつた。しかし全く移ろうとしないものが一つあつた。それは彼女に激しい苦痛を与えている訳ではないが、片時も彼女から離れようとしなかつた。もつとも優れた祈禱師達 (exorcists) の力をも寄せ付けない非常に悪意のある霊であつた。」

微妙なニュアンスをも訳出されている。細かい点では大殿を何故左大臣家と訳さず、[At Sanjo]としたのか知りたい。

また原文の「物の怪もののけ」、生霊いんたまなどいふもの多く出で来て……」のトコを[Several malign spirits …]としているが原文のニュアンスとは違う。少なくとも、英語には「生霊いんたま」を表現することはできない。

ところですでに触れたが、ミャンマー語で精霊・悪霊を翻訳する場合、状況・場面によりいろいろな言葉が存在する。この場合、ミャンマー語では、物の怪は「マカウンソーワー」〈*ma:ka:u:n:so:wa:ra*〉、「生霊いんたま」は「ソウン」〈*so:u:n*〉が適当と考える。

また原文の「人にさらに移らず、……」の「人」は、ここでは「憑座」にあたるが、さすがにこれをサイデンステッカーは[the medium]と訳出しているが、これはミャンマー語では「ナッカドー」〈*na:ka:do*〉にあたる。その他「験者」は悪霊を追い払う祈祷師ということから[exorcist]と訳しているが、ミャンマー語では「サヤドー」〈*sa:ya:do*〉がこれに当てはまると考えている。

第六節 おわりに

『源氏物語』のミャンマー語翻訳にあたり、『源氏物語』の背景として大きく存在している仏教と信仰について、平安時代の仏教文化を中心に、日本・ミャンマー仏教文化の関連性、類似性について述べた。まず『源氏物語』と一一七〇年代、バガン王朝時代の詩を比較してみた。両者には、仏教の思想、教義が色濃く出ている。ミャンマーでは、このような思想をはじめとする世界が、現在まで広く引き継がれている。

また英語訳として、英国人ウエイリー、米国人サイデンステッカーの翻訳を参考にし、翻訳と仏教・信仰について検討を加えた。これによると、ウエイリーは、その豊かな感性、想像力などを駆使し、原文の全体像を損なわず読み取るような翻訳をやりとげ、『源氏物語』の素晴らしさ、その感動を世界の人々に広げたのである。ちなみに、サイデンステッカーが『源氏物語』の翻訳を志したきっかけは、このウエイリー訳であった。しかしウエイリーの『源氏物語』においては、前述の事例に示すごとく、仏教・仏教文化に関しては深く詳しくは触れていない。仏教の無常観、運命観については殆ど触れていない。前世・来世の概念に関しては多く省略されている。文中の出家心境、当時の人々の持つ出家感覚が読み取れていない。

これに対しサイデンステッカーは、仏教的表現を巧みに使い、その雰囲気を出している。仏教の無常観、前世・現世・来世、三世因果の知識を持つている。また仏教的背景・慣習に配慮、仏教の法事にも通じている。さらに文中から出家の感情・感覚なども読みとることもできるようである。これら仏教的なことは、サイデンステッカーが日本に来てから、日本の中で見聞きし学び、身につけたと考える。このようなことはその国の中その文化に浸らなければ、なかなか身に付かない。本論におけるウエイリーとサイデンステッカーの違い、差はこの辺からも来ていると考える。翻訳ではやはり現地を知ることが重要である。

英国でウエイリー訳『*The Tale of Genji*』が出版された時、批評家達は、我々がこれまで夢にも思わなかった不思議な文明の存在を教えてくれたと評した。日本と欧米とは、当時、これほど厚い異文化の壁があったのである。これに対し仏教文化が千年近くに渡り、しつかり受け継がれてきたミャンマーでは、『源氏物語』に対する時代軸的な異文化の壁・異文化衝突は少ないのではないだろうか。このようなことから、仏教と信仰に関する翻訳については、ミャンマー語の翻訳は欧米の翻訳と比べると容易なのではないか、そしてこれはまた読者によく理解されるのではないかと期待している。また、仏教に関連した原文の微妙な味も伝えられると考えられる。

また、確かに平安中期、『源氏物語』時代の日本の仏教の状況と現在のミャンマーの仏教の間には多くの共通点があるが、ミャンマーの仏教ではマハーギーリ・ナツのように精霊が仏教のヒエラルキーの中にしつかり組み込まれていること、また『源氏物語』の時代の女性の出家の様子が頭髮などにおいて違っていることなど微妙な違いもあるので、『源氏物語』ミャンマー語翻訳に当たっては、このようなことも念頭において翻訳することも必要であろう。

参考文献

- ・ 秋山 虔 「巻頭言 紫式部学会創立七十周年」『むらさき』 第三九輯 武蔵野書院 二〇〇二年十二月
- ・ 伊井春樹 『海外における源氏物語の世界―翻訳と研究―』 風間書房 二〇〇四年
- ・ 井上英明 『世界文学における源氏物語』『源氏物語講座 第一巻 主題と方法』 有精堂出版株式会社 一九七一年
- ・ 井上英明 『日本の古典を訳した海外の本』『国文学』一九八八年九月
- ・ 奥平龍二監修 『ミャンマー惹きみの文化と伝統』 フジタヴァンテ編 東京美術 一九九七年
- ・ 塩田良平 『源氏物語』(古典文学集四) ポプラ社 一九九二年

- ・高杉一郎 「日本古典文学の外国語について」『文学』 岩波書店 一九八二年六月
- ・土佐桂子 『ビルマのウェイザー信仰』 勁草書房 二〇〇〇年
- ・名波弘彰 「夕顔巻の怪奇の語りの表現構造」『文学研究論集』第一九号 筑波大学比較・理論文学会 二〇〇〇一年三月
- ・西沢正史編 『源氏物語を知る事典』 東京堂出版 一九九八年
- ・西田みきお 「語り手の効果と機能―ボウを読む―」津田塾大学 言語文化研究所報』八 一九九三年七月
- ・丸尾寿郎 『源氏物語外国語訳』『国文学』一九六五年七月
- ・山本武夫 『詳解日本史』 旺文社 一九九一年
- ・G・E・ハーヴェイ 『ビルマ史』〈東亜研究所訳〉 成瀬恭 一九七六年
- ・Myanmar - English Dictionary : Department of Myanmar Language Commission : 2001
- ・The Tale of Genji, translated by Arthur Waley. Dover Publications, Inc. Mineola, New York. 2000
- ・The Tale of Genji, translated by Edward G. Seidensticker. Everyman's Library (Alfred A. Knopf, Inc.). 1992

【付記】

- ・本論文の中に引用した『源氏物語』各部分は、阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男 一九九四年 『新編日本古典文学全集』二〇 源氏物語〈全五冊〉小学館による。その下に冊語・巻名・頁数をそれぞれ示す。
- かぎりとして別るる道の…(①桐壺二三頁)
- 括弧内は、小学館、新編『源氏物語』一冊目、桐壺の二三頁を示す。

【注】

- (1) 丸尾寿郎 『源氏物語外国語訳』『国文学』一九六五年七月
- (2) 秋山虔 『巻頭言 紫式部学会創立七十周年』『むらさき』第二九輯 武蔵野学院 二〇〇二年十二月
- (3) 奥与謝野晶子訳 『源氏物語』上巻 角川文庫 一九九一年
- (4) 塩田良平 『源氏物語』〈古典文学全集四〉 ポプラ社 一九九二年
- (5) 岡 一男 『源氏物語の普遍性』―故ドニ・ソーラ博士の所説を追って―『古典の再評価』(頁二〇三) 井上英明 『世界文学における源氏物語』『源氏物語講座第一巻主題と方法』有精堂出版 一九七一年)
- (6) 高杉一郎 『日本古典文学の外国語訳について』『文学』 岩波書店 一九八二年六月

- (7) 井上英明 『世界文学における源氏物語』 『源氏物語講座第一巻主題と方法』 有精堂出版 一九七一年
- (8) 仏への功德は最も高い功德としては、バゴダ・寺院の建立、仏像・壁画の制作である。またこれらの修繕をすることも大きな功德となる。その他、僧侶になること、息子達を僧侶にすること、出家者に布施をし、供物を差し上げること、早朝托鉢僧に炊き立ての飯米や惣菜を提供すること、出家者に生活必需品の補給をすること、このようなことが功德になるとされている。
- (9) G・E・ハーヴェイ 《東亜研究所訳》 『ビルマ史』 成瀬恭 一九七六年 八二頁 引用
- (10) 土佐桂子 『ビルマのウエイザ―信仰』 勁草書房 二〇〇〇年 一二六頁 参考